
神獣のトビラ

Jumper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神獣のトビラ

【コード】

N2091Z

【作者名】

Jumper

【あらすじ】

ごく普通の少年、コートのある日一匹の竜(?)のシャイトが現れる。

「よう！驚いた!？」

動揺したまま彼についていったコート。

やがて世界の命運を分ける戦いに参加することになるつとは、シャイトにも予想出来なかっただろう・・・

プロローグ 神獣のトビラ

人間界に伝わる伝説の一部。

『世界のでっぺんにトビラがあった。

世界を創りし「神獣」達のトビラ。
彼らなくしては決して開かぬトビラ。

トビラは世界が終わるときに開く。
新たな「次元」を求めて開く。

世界が壊れかけたとき、神獣は勇者を従え、
トビラを開き、次元を開くだろう……。』

この物語は、そんな「神獣のトビラ」と「神獣」、
そして世界の危機に巻き込まれた少年コートの、
厳しくも楽しい、長い冒険のお話

プロローグ 神獣のトビラ（後書き）

作者の妄想の産物。

文章力が至らなさをすぎると思いますが何卒宜しくお願いします。

第1話 ドラゴン、現る！（前書き）

第1話。

第1話 ドラゴン、現る！

夏。太陽がギンギンが照りつけている。

ここは「ラムルド大陸」の小さな町、「ロット」。

鉱石の産地として名高く、今日もピツケルを担いだ男達が町を歩き交う。

町の中心部に巨大な鉱山。囲むように市場と住宅街がある。

鉱山から北へは鉱物輸送用の道が開けている。

少年コート。

彼もまたこの住人の一人であった。

先月15の誕生日を迎えたが、相変わらず彼女もおらず、叔父の仕事を手伝う毎日。

3年前に母を亡くし、父は物心ついたところから行方が分かっていない。

母が亡くなったタイミングで、叔父の家へやって来た。

叔父は「よせ」といつているが、コートは叔父の仕事を一生懸命手伝っている。

採掘された鉱石を運び出す仕事だ。

結構肉体労働で、15の彼にとって、夏の日この仕事は拷問に近い。

「飯にしよう！ー！！」

彼の叔父の声が響き、

「イーリヤッホウ！」

ピツケルや台車を投げ捨てた男達が一斉に走り出した。

「オレも食おう・・・」

コートも台車をおき、鉱山を後にした。

「ウヒー！旨そうなナメクジ飯！」

「・・・相変わらず『変』食だね」

「いやいや、旨いぞナ飯」

今ではお互い敬語を止めて話している。

今彼の叔父が手にしているのは、彼の好物のナメクジ飯、略してナ飯だ。

平気で食べられるとかではなく、本当に好物だと彼は語っている。

「さて、味付けに塩を」

「ええ！？ナメクジだぞ！？溶けるよ！」

「チーズ感覚で食べるぞ！」

親指を立て、ウインクするコートの父、「レイン」。

コートははあ、とため息をついた後、用を足しにトイレへ向かった。

鉾山に隣接する加工工場内に、鉾山職員用のトイレがある。

用を足し、工場を跡にしようとしたときだ。

ドアに手をかけた瞬間、コートはふと気配を感じた。

「・・・？」

勘違いだろうか？そう思いドアを開けようとするがやはり気になる。

「誰だ・・・」

そつと後ろを振り返った。

ブン、と何かが空気を切る音がした。

「何だ！？誰だ！」

ドアを少し開け、逃げられる体勢を作り、警戒する。

「まーまーそんなあわてないですよ」

緊張感のない間抜けた声が聞こえた。
子供の声。

「・・・子供？」

コートは辺りを見回すが、人などそこにいなかった。
ドア付近は普段、工場の職員のたまり場になっているだけ。
そこを定位置としている人間は居ないはず。

「姿を見せてくれよ・・・」

おそろおそろコートは聞いた。

すると直後、彼の前で何かが光り、横切った。

「おわっ!?!?人魂!?!」

「ちげーよ」

いつの間にか光は彼の前で止まっていた。

やがて声の主である光の輝きが落ちてきて、姿が露わになる。

「・・・え？」

これ、ドラゴン? コートはそう思った。

丸くて大きな瞳。頭の後ろから尾にかけては何本か触手のようなものが伸びている。

手は幼児の手のように小さく、犬のそれに近いような爪が3本。

また、背中には小さな羽が。

「よう! 驚いた!?!」

「驚かないわけないだろっ!?!」

「結論から言おう。オレはドラゴンでお前を迎えに来た。さあ行く準備はいいか3 - 2 - 1・・・」

「ちよつ・・・待・・・て!」

もの凄い早口で言うドラゴンにコートは詰まった声で言った。

「まずお前は何なんだ!」

「シャイト。」

「いや名前じゃなく」

「じゃあ何だ?」

「えと・・・何だ?種類?」

人類以外と話すのは当たり前のように初めてだったコートは言葉を上手く選べない。

「種類・・・?んー・・・『神獣』、になるのか?」

「・・・神獣?」

コートは耳を疑った。

トイレから出てきて帰ろうと思ったら突如出てきたちっちゃい竜を神と信じる方が無理だった。

「あ、ああ、珍獣ね。なるへそ。」

「違う!神に獣で『神獣』!」

シャイトと名乗るドラゴンは半分キレ気味で言った。

「・・・」

本当かどうかは分からないが、取り敢えず認めないと先に進めない。なのでコートは話を合わせることにした。

「で、神獣サマがオレに何の用ですまする?」

わざとらしく敬語を使うコート。

すると急にシャイトは真剣な表情になった。

「言っても信じてもらえないと思うけど、今『神界』があぶないんだよ」

シャイトは言葉を続ける。

「今から言うことを真実と信じ、誰にも言わないと約束してくれる?」

「言いふらしはしない。内容によるな、信じるかは。あと神界の危機とオレの関連性詳しく」

「・・・言いふらさないなら良かった。関連性についても話す・・・」

「安堵の表情を浮かべるシャイト。」

目を瞑り、大きく息をはいた後、シャイトは口を開いた。

第2話 神界

「まずは神界について話すよ……。神界とは、この世界の遙か上空にある……。」

「そう言えばそんなおとぎ話を聞いたことがある。」
思い出しながらコートが言った。

「神界は『役目を終えた神々』が、次の役目が来るまでに過ごす場所なんだ。」

「役目？」

「生物にはそれぞれ個々の役目が存在するんだ……」
話を続けるシャイト。

「神界は、2000年前までは活動していたんだ。だけど2000年前、突如神界に襲撃……！」

震える声で力強くシャイトは言った。

「命を取られたもの、ケガで記憶をなくした者などもいた。」

コートは不思議そうに聞いた。

「何でお前は無事なんだ？」

その問いに、シャイトは力無く、

「それでオレの父親はやられた……。子供だったオレをかばってね。」

……

「……」

コートにはかけられる言葉が見つからなかった。

「オレの他にも生き残りはいる。そしてそんな奴らに犯人グループを聞くと必ずこう言う。」

「……『たった一人だ』と……」

コートの顔が青ざめた。

もしこれが本当だとしたら大変な事だ。

「神」と呼ばれる者をたった一人で滅ぼした者が居るといふのか……

彼の冷や汗が止まらない。
そんな異常な事態に巻き込まれたら・・・
不安が頭をよぎる。

「なあ、オレを呼び止めた理由を話してくれ・・・」
青ざめた表情で聞いた。

「神界までついてきてくれれば話は早い」

「何故だよ！？そんな危険な場所に　　っ」

「今は大丈夫だ！襲撃に備えて常に魔力で防御膜を展開している・・・」

コートの言葉を遮ってシャイトは言った。

「これで人生終わったらお前のせいだ・・・」

覚悟を決めたコートはシャイトに言った。

（嘘にしては出来すぎだ。本当だとして、こんな事に人間を巻き込むなんて普通あり得ない。）

（オレに何かあるのだろう。）

「ありがとう。恩に切る」

シャイトはニツと笑った。

数秒後、彼らの周りを紫色の光が包む。

「何だ！？」

焦るコートにシャイトは言った。

「長が誘っている。味方だ。心配要らない」

光はやがて大きくなり、その後、二人ごと消えてしまった。

「何だよここは・・・」

夢でも見ているのか、とコートは錯覚した。

光に誘われ、やって来たのは神界だった。

「奥に長が居る。彼を交えて話をしなければ・・・」

シャイトに言われるがまま、コートは奥へ奥へ進んでいった。

地面はない。透明な空間にコートは立っていた。

何も無いところに木が、池が、家がたっている。

空に雲はない。ただただ青空が広がっている。

雲は正確にはないわけではなく、透明な床の下に見えていた。

「さ、この中だ」

来たときから見えていたひとときわ大きな建物にコート達は入っている。

奥へ進むと、玉座に人が座っていた。

人間である。長くてふわふわしているような髭を生やし、足と腕を組んで座っている、大柄なおじいさん。

「よく来てくれた・・・」

「はあ・・・」

コートは反応に困った。

が、すぐに話を始めた。

「あのっ・・・オレ、ここに呼ばれたんだけど・・・ですけど・・・」

敬語がよいのかため口でよいのか戸惑うコート。

「うむ。シャイトに君を呼ぶよう言ったのは儂じゃ」

「そうなんだよ・・・」

シャイトはコートに向かって言った。

「君、名は」

コートは長に聞かれた。

(そう言えばシャイトにも名乗ってなかったな・・・)

「コート・・・」

「父の名はダウンか」

そう問われる。

「何故知っているのですか・・・」

父の顔は覚えていないが、叔父から話は聞いている。名前は間違いなく「ダウン」。

コートの質問を無視し、長は歓喜の声を上げた。

「見つ・・・けた！大儀であったシャイトよ！」

「光栄に預かります」

ぺこっと頭を下げたシャイト。

「どういう事でしょうか・・・」

訳が分からないコートが問う。

長は咳払いをしてから言った。

「君はある一族の末裔であるのだ。」

「・・・？」

「『ネイチエスト：神獣族』、君はその一族の最後の生き残りだ・・・」

第2話 神界（後書き）

二話終了です。

コートの人格が私自身上手くつかめていない現状・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091z/>

神獣のトビラ

2011年12月8日01時11分発行